

東日本大震災復興への道をより早く！より強く！

宮城県仙台市なのはなホーム

加々見 ちづ子

みなさん、こんにちは。

私は宮城県仙台市にあります発達に心配のある子どもが親といっしょに通う母子通園施設仙台市なのはなホームの園長をしています、加々見ちづ子といます。

この度の東日本大震災に際して暖かい励ましの言葉やたくさんの義援金をいただきましてありがとうございます。

今日は国内最大級といわれるマグニチュード9、宮城県栗原市で最大震度7の大地震が起きた3月11日午後2時46分から始まった被災者としての日々を報告したいと思います。

その時 私は

その時私は、大型量販店で教材購入をし、15時からの会議に間に合うよう大急ぎで店を出たところでした。その直後店の天井が落ち、建物は全壊だったと後で聞き、間一髪で助かったことに身がすくむ思いでした。車中にも体が飛び上がらんばかりの揺れで、これはただごとではないと察しがつきました。車外では建物から飛び出してきたうずくまる人や、泣きだす女子高生の姿が見えました。信号も止まり、水が噴き出したり陥没したりする道路を夢中で車を走らせやっとの思いで園に着き、雪の舞う園庭にうずくまる職員と無事を確かめ合いました。

その夜はケアホームの利用者5名、卒園した母子家庭1組、在籍児の祖父母を含む6人家族1組、そして職員13名がなのはなホームに避難してきました。園舎の横を走る消防車から、“ガス漏れの疑いがあるので火を使わないように”とのアナウンスが聞こえ、物置からひっぱり出した石油ストーブも使えず、みんなで毛布をかぶりながら肩を寄せ合い寒さをしのいでいました。天井からつるした2個の懐中電灯のほの暗い明かりの下、夕食もなく職員室にあった少しのおやつを分け合い、非常用のペットボトルの水を1人1本ずつもち、それを命綱のように握り、誰もが無口になっていました。絶え間なく続く余震の中、園庭にテントを張りいつでも園庭に飛び出せるよう、扉の側にドアマンとして職員2名が、余震が来るたび扉を開けたり閉めたりして暗闇に降りそそぐ雪を見つめていました。

その日から3月21日までなのはなホームは避難所となり、そしてなのはな会の対策本部になりました。この間、職員は在園児とその家族や出勤ができていない職員の安否確認に奔走しました。電話もメールもつながらず、ガソリン不足のため自転車を使って園児の家を訪ねたこともありました。そして家屋の被害はあったものの、子どもとその家族、職員の全員の無事確認がとれた時は本当にうれしかったです。

とし君のこと

ところがその喜びもつかの間、卒園児で21才を迎えたばかりのとし君の訃報が飛び込んできたのです。彼はアスペルガーで、19才でホームヘルパー2級の資格を取り、運転免許も人の何倍もの努力をして取り、車で2時間もかかる海辺の老人ホームに就職できたのでした。半年前の電話では“先生やっとな夜勤もできるようになりました。給料もあがりました。”といつもていねいな語り口で知らせてくれた彼が、老人ホームごと津波にさらわれたという事実にとっても納得のいかない私に“先生、としはね、老人をおいて逃げるなんてできない子だものね”と母親が淋しそうに告げたのが、今も私の心につよく残ります。

なのはなホームの役割

さて、ホームの子どもの安否確認でわかったのは、子どもたちの多くは県内外の祖父母の家に避難しているということでした。しかしその生活は大変なものでした。ただでさえ状況把握のむづかしい子どもたちは余震におびえ、食事をとらなくなってしまった子や、親を追いかけまわして泣いてばかりの子、夜泣きをするようになった子や、偏食がひどくなってしまった子など、親の不安は大きくなるばかりでした。そして我が子の障害が重くなってしまったと訴える親もでてきました。そんな時私は、“障害が重くなったのではなくどの子も現状を受け止めるために必死になって不安とたたかっている姿なのだからしっかり受け止めてあげてね”と話しました。そしてライフラインは整っていなかったけれど、思い切って3月23日より園を開放することにしました。ガス暖房の保育室はガスがないため1室だけに石油ストーブ3台を置き、暖をとれるようにしました。ガソリン不足で通える子は5～6人と少なかったけれど、通う親子の笑顔を見て親子を孤立させないことが園の大切な役割だと実感しました。そして少しずつ集う親子も増えていきました。親の強い願いから卒園式を3月29日に行い、4月11日には新年度始園式を行い、卒園児のために特別支援学校の入学式前日の4月21日まで園開放を続けました。そのためなのはなホームが平常保育に戻ったのは、5月の連休明けでした。

まさきくんのこと

5月も半ばすぎるところ、疲れた様子の母親に連れられた自閉症で3才半になるまさき君がなのはなホームにやってきました。まさき君は宮城県本吉郡南三陸町で津波に遭い家を流されてしまい、命からがらたどりついた避難所を転々としたあと、遠い親せきを頼って仙台に来たのでした。避難所を転々としたのは、まさき君にとって家の流出を理解しなかったのはいうまでもないことでしたが、避難所での生活は、まさき君の不安を増幅するばかりでした。そのため、高い所に登る、動き回る、奇声を発するなどありとあらゆる方法で不安を訴えていたまさき君を御両親はどうすることもできず疲れてしまい、結局、仕事のある父親を南三陸の避難所に残し、母親とまさき君2人で仙台にやってきました。

仙台にきてまさき君は落ち着かず食事も遊び食べをするので、母親は親戚の手前叱ることも多くなってしまい、困り果て発達相談支援センターに相談、なのはなホームにつながったのでした。

入園2、3日は園につくと保育室には入らず園庭を走り回るまさき君を見て“少しもじっとしていないんです”と母親はため息まじりにつぶやくのでした。しかし4、5日もすると保育室でのお集まりや設定保育に参加できるようになり、お友だちを追いかけて遊ぶ姿もみられるようになりました。1週間もすると笑顔が多くなり、母親も久しぶりに“こんな顔をみました”とうれしそうに話してくれました。それから1週間、日に日に母と子の笑顔が増えていきましたが、そんなある日“先生仮設住宅が当たったので南三陸に帰ります”とのこと。うれしいような淋しいような複雑な思いでお別れ会をすると、その席上であいさつしていた母親が突然別れを惜しんで泣き出してしまいました。すると、母親の周りをうろうろしていたまさき君はあわてて自分の椅子に座り、しっかりと母親の姿を見つめたのでした。“ボクはこんなにできるから大丈夫だよ”といわんばかりのそのしっかりとしたまなざしに私達も胸をうたれたのでした。

復興への道をより早く！より強く！

大震災から四ヵ月を迎えようとしている今、仙台市内の中心部ではブルーシートに覆われた屋根や家屋が目立ちます。これは大工さん不足や、資材不足で家の修理がすすまないからです。また宮城や岩手の海沿いではいまだ津波でできたがれきの山や異臭に悩まされています。さらに福島原発事故では次々と深刻な問題が起こっています。6月30日現在、東北三県で死者、行方不明者があわせて22,630人もいます。

私たち被災者は今、切に復興への道をより早く、より強く望みます。このねがいをより確かなものにするために、これからもみなさまのお力をお借りしたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。